



平成30年2月1日(木)

# 藤 棚

第348号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>  
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

## 昔の生徒 今の生徒

校長 小川義男

昔の生徒、特に女生徒は、己を成熟した人間として見て貰いたがった。生徒、女学生として見られたがるのではなく、成熟した「婦人」として認められることを望んだのである。女学校は五年で卒業であったから、今の高校二年生である。卒業後、直ちに結婚する人もいた。

だから、男子生徒の私たちには、少し眩しかったし、「お姉様」に見えたのである。今の高校生、特に女生徒は、むしろ実存より己を若く、幼く見られることの方を望む。その表れが、鞆にくっつけられているお人形の類(たぐい)であろう。卒業後、間もなく結婚するかも知れぬ昔の女学生諸君にとっては、想像もできないことだったであろう。

私の中学、高校時代に、制服というものは、事実上なかった。いや、制度としては存在したのだが、我が国全体の経済的窮乏から、事実上、消失してしまっていたのである。私は、足駄を履いて登校した。地下足袋の事もあった。

鞆の制定品など、夢の又夢、大抵は安い布地の下げ鞆を肩に掛けていた。ズックと言われる、布製の手提げ鞆の生徒もいた。女学生は、裕福な家庭の子女が多かったから、鞆も高価なものを持っていたと思う。記憶にはない。

面白いのは、ブックバンドという物が流行していたことである。本三冊ほどに、十文字に紐を掛け、肩に引っかけて登校するのである。中にはコンサイスと言われる当時最新鋭の英和辞書も、一緒に結ばれている場合があった。

文学書、哲学書に読みふけるのがダンディーだとされた。もっとも、それを「ツモリコイテイル」と冷笑する動きもあった。私は、その「読書人グループ」だったが、私は仲間に温かく受け入れられていた。振り返って、独特の存在だったのかも知れない。

女子の大学進学指向については問題もある。婚期が遅くなるからである。

昔は、大学に進む生徒は、女学生の中でも、ごくごく稀だったし、進学しても、ほとんどが短大であった。名は伏せるが、ある大学など、四年コースよりは二年コースの方の入学試験が難しかったほどである。

婚期の遅れは、国家、ひいては人類全体に取り深刻な問題である。大学を卒業して 22 歳、そ

の後就職して働くことの面白さを知ると、瞬く間に時が過ぎる。育児には、大変な努力、体力を要するから、本来は、最も遅しく、充実した 20 歳頃に第一子を出産するというのが望ましい。

私は、大学生の場合、いわゆる学生結婚して、大学二年生頃に第一子を産むのが望ましいと思う。大学は、その施設を整えるべきだし、企業も採用試験で、母親学生を優先採用するようにならないければ駄目だ。

少子化と言われる。漱石も 8 人キョウダイであった。だから、あんな立派に育ったとも言えるのではないか。今は子供は、多くて二人の時代である。これには、国民思想のほかに、学習塾に、ひとり年間 60 万円以上の学費がかかっているという実情も原因している。学校は何のためにあるのか。私は、予備校に通う生徒が出た場合は、我々の、何かが足りなかったのだと反省している。

日本で一番高いコストを要する教育機関、それが公立学校である。私立学校も共に、深く反省すべきではないだろうか。

焦点が逸れた。今の生徒にも素晴らしいところが沢山あるが、素晴らしいところはともかくとして、昔の生徒に学ぶべき点は何だろうか。

本校の生徒に、伸ばし言葉、語尾上げ言葉はない。やはり、知的水準が高いのだと思う。お人形さんは、好きなら、ぶらぶら下げるのも良いと思う。

稀に、何らもつけていない女生徒を見る。何かしら知的な印象を受けるのは、私の感覚が古いからなのかも知れない。

昔の生徒に学ぶべき点、それは読書だろう。今の高校生の知的水準は、昔に比し、格段に劣る。読書していないからである。だから、大学入試に際しても、国語が、なかなか難しい。英語も最後は、国語力の勝負になる。知性、文化を媒介するもの、否、むしろ文化そのものが、言語によって生み出されたものなのだから、考えて見れば、当たり前の話である。

テレビの娯楽番組の低俗さ、登場する人物の気品のなさ、何故あんなになるのか。若しかすると、読書していないからかも知れない。

スマホの向こうにいるのは、善人だが、普通の人物である。活字の向こうにいるのは天才だ。いつでも、只で、天才と交われるのに、善人ではあっても、電波を通してまで普通の人間に交友関係を拡大するというのは、あまり得策ではない。

昔の生徒、今の生徒、それはそれぞれに素晴らしい。我々が百年前の人間に劣るはずはないのだ。でも、若しかすると昔の人間の方に、偉いところがあったかも知れない。そう思って個人の思想、特に天才の思想に学ぼうとする心が大切である。

私が、ひと目でもお会いしたかったと思う人に、金田一京助先生がいる。同じ時代に生きていたのに、残念なことと思う。もうひとは、ヘレンケラー先生である。私は、この方を 20 世紀最大の人物であったと確信している。その方を育てたサリバン先生は、何と素晴らしい方だったろうか。

もう、その願いは果たされない。しかし、活字の中にヘレンケラー先生も、金田一京助先生も実存して居られる。

何だ、騙されたと諸君は思うかも知れない。しかし、活字の向こうで天才に会えるというのは事実である。

今の世代も本当に素晴らしい。しかし、昔の世代、そして、もっと向こうの、天才達と交わって欲しいという私の気持ちにも、少しは、友情を示してくれたらなあ、と私は願う。